

中河与一文芸賞（作文）

「干し柿が教えてくれたこと」

香川大学教育学部附属坂出小学校 六年

石 井 滉 太 郎

秋のある日、ばあちゃんが紙袋を持って、うちにやってきた。わくわくしながら袋をのぞいたら、たくさんの柿。ぼくは思わず、のけぞった。ぼくは、柿が苦手なのだ。ばあちゃんは、「この渋柿で干し柿作ったら？」と言って、帰って行った。

夕方、台所から家族の楽しそうな声が聞こえてきた。見に行ったら、弟が渋柿の皮をむいて、へたにひもを付けていた。となりでは、弟と妹がひもを持って、渋柿を熱いお湯につけては持ち上げていた。「柿がお風呂に入っているみたい！」と楽しそう。ぼくは、見ていたらやってみたくなって、渋柿をお湯につける作業を手伝った。その渋柿を物干しざおに吊るしたら、体中から白い湯気を上げてゆっくりゆれていた。

この後、渋柿をときどき指でもむ必要があるらしい。その作業を、兄弟の中で一番年上という理由だけで、ぼくが中心となって進めることになってしまった。ぼくは、柿が苦手なのをみんな知っているのに。

一週間後、ぼくは初めて柿をもんでみた。柿はまだやわらかくなっていなかったから、これがどうおいしくなるのか不思議だった。

さらに一週間過ぎたころ、ぼくは再び柿をもんだ。柿は前よりもやわらかくなっていて、その変化に驚いた。弟や妹も呼んで、みんなでもんだ。弟は、「柿をつぶさんようにせんとな。」と、小さい手で大事そうにもんで

いた。おいしくなるといいなと思った。

この先、柿がどう変わっていくのか知りたくて、ぼくは図書館へ行って、干し柿の作り方の本を借りてきた。本には、『干した柿を箱に並べ、新聞紙でふたをして冷蔵庫に入れる。二週間たったら、表面に白い粉が付いた甘くておいしい干し柿ができあがる。』と書いてあった。ぼくは、本と同じようにして冷蔵庫に入れてみた。干し柿がうまくできたら、弟や妹にじまんしてやろうと思っていた。

ところがそのうち、ぼくは冷蔵庫の箱のことをすっかり忘れてしまっていた。一か月がすぎ、さらにしばらくたつたころ、弟から、「おにいちゃん、干し柿どうなつとん？」と聞かれて、ハツとした。あわてて冷蔵庫から箱を取り出した。ドキドキしながら新聞紙のふたをはがしたら、白い粉が付いたおいしそうな干し柿ではなく、カチカチで石のような干し柿が並んでいた。弟がかじつてみたけれど、硬くて歯が立たない。あゝあ、やつちゃった。ぼくは、こんなことになって申し訳ない気持ちになった。

「なんでそもそも、柿が苦手なぼくが進めることになってしまったんや。」とも思ったが、それを言っても何も変わらなかった。

それから、柿の話題になるたびに、ぼくは胸が痛かった。街中で、柿の木を見かけるたびにこう思った。なんで日本の庭には、こんなに柿の木があるんやろう！

気になって調べてみると、もともと柿というのは渋柿のことだと知って驚いた。それが突然変異によって、渋くない甘柿が生まれたとのこと。甘い食べ物ほとんど無かった時代、ビタミンやミネラルを多く含む柿はよく植えられていたそうだ。今では高齢化で、庭の柿が収穫できず困っている人も増えてきているらしい。庭に柿の木がある方に話を聞くと、「母が柿の産地から嫁入りし、生まれ育った環境がなつかしくて植えた柿の木だ

から思い入れがある。」と、話してくれた。「柿の収穫は大変だけど、生きている間は柿の木を切らずに共に生きていきたい。」とも言っていた。

柿について、ぼくはこれまでこんなに考えたことがなかった。けれど、干し柿作りを経験したことで、街中で柿の木を見かけると、この柿の木にはどんな歴史があるのかなと思うようになった。柿の木がある周りの景色が前とは違って見えるようになった。

弟の誕生日がやってきた。弟とはケンカはするけれど、仲良しだから何かプレゼントしようと思い、買い物へ行くと売り場に干し柿が並んでいた。ぼくは、弟に干し柿を食べさせてあげられなかったことを思い出し、喜ぶかなあと思いながら、ためたおこづかいで干し柿を買って帰った。

その夜、弟はケーキを前にうれしそうだった。ぼくは、かつこいいプレゼントが良かったかなと思いながら、「お誕生日おめでとう！」と干し柿をわたした。弟は、すぐに袋を開け、手でつまんでパクツと食べた。とても幸せそうだった。弟にすすめられて、ぼくも干し柿を食べてみた。初めて食べた干し柿は、思っていたよりも自然な甘さが口の中に広がった。みんながこれを楽しみにしていたのかと思うと、ぼくは複雑な気持ちだった。

もうすぐ季節が変わって、秋がやってくる。ぼくにとっては、再挑戦の秋だ。干し柿作りは大変だけど、次こそは成功させて、ぼくの干し柿でみんなを喜ばせるぞ!!